

## 大学における異分野横断型授業の試み

### —前近代のイギリスと中国における「外国人」の比較を題材として—

Applying Interdisciplinary Research Techniques in University Education  
—Through Comparative Studies on “Aliens” in Premodern England and China—

上野 未央

大妻女子大学比較文化学部

Mio Ueno

Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：大学教育，授業改善，比較史，分野横断的研究

Key words : University Education, Faculty Development, Comparative History, Interdisciplinary Studies

#### 抄録

領域横断的な学びの重要性は、しばしば指摘されてきた。しかし、研究の細分化によって、異なる分野の研究者同士の対話が難しくなっていることも指摘されている。そこでイギリス中世史を専門とする筆者と、中国思想史の専門家とが共に授業を行った。この授業を「ジョイント授業」と呼ぶ。ジョイント授業は、筆者の担当する授業「比較社会論」においてオンデマンド授業として複数回行った。本稿は、その報告と考察からなる。

ジョイント授業では「人を区別すること」という共通テーマを置き、それぞれの専門分野から授業を行い、2人の教員による質疑応答と議論を行った。授業後には、学生からの授業に対するコメントを募り、その次の回に、学生のコメントを数点紹介し、それらへの回答を通して教員同士がさらなる対話を行った。これらの授業と対話の様子も動画にし、授業として配信した。

授業作りにあたっては、隣接分野とはいえ専門の異なる教員が、一つのテーマについて論じることの難しさを痛感した。しかし、互いの研究内容に対して率直に質問して語りあい、教員同士の意見交換の様子を学生にも見せることとした。その結果、ある程度、「学生も共に考える」授業を展開することができたと考える。専門分野が異なるからこそ、ごく基本的なことを確認しながら進めることにつながったのではないかと。しかし、授業が難しかったというコメントもあり、専門的な内容をどう伝えるかという点では課題が残った。専門的な研究内容を教育に生かしていくことについては、今後も課題として考えていきたい。

#### 1. はじめに

領域横断的な学びの重要性は、これまでも指摘されてきた。日本学術会議は2017年の提言「学術の総合的発展をめざして—人文・社会科学からの提言—」において「隣接分野の研究動向や成果を知り、領域横断的に研究全体を俯瞰して展望を得る必要性」を指摘している<sup>[1]</sup>。大学教育の場においても、領域横断的な学びが重要であるといわれてきた。とりわけ、学際的な教育としての教養科目あるいはリベラル・アーツ教育についての議

論が活発に行われてきた。その一部として、異なる分野の教員が担当するオムニバス授業に関する検討も行われてきている<sup>[2]</sup>。しかし、同時に、研究の細分化によって、異なる分野の研究者同士の対話が難しくなっていることも指摘されており<sup>[3]</sup>、それは教育の場にも影響を与えている。

筆者の勤務する大妻女子大学比較文化学部においても、異なる分野の協同の必要性は意識されている。それでも、領域横断的な教育が十分に行われてきたとはいえない。比較文化学部には、人文

学・社会科学分野の様々な専門分野の研究者たちが集まっており、学部としては学際的な学びを提供することを特徴としている。しかし、異なる分野の教員同士が対話を行いながら進めるような授業は、筆者の知る限りではほとんど行われてこなかった。そこで、イギリス中世史を専門とする筆者と、同学部に所属する中国思想史の専門家とが「人を区別すること」という共通テーマを設定して授業を行った。この授業をジョイント授業と呼ぶこととする。ジョイント授業の試みは、筆者が担当する比較文化学部の専門教育科目「比較社会論」において行った。本稿は、この試みについての報告と考察からなる。

まず、学部カリキュラムにおける「比較社会論」の位置づけについて説明する。そのうえで、ジョイント授業の内容をまとめ、授業後に学生から寄せられた声を紹介する。そして、今回行ったジョイント授業について、評価できる点、問題点、改善策などについて検討する。

## 2. 大妻女子大学比較文化学部における教育と今回の取り組み

比較文化学部の学部専門科目は大きく2種類に分かれている。学部共通科目と、アジア・アメリカ・ヨーロッパという3つの文化コースの専門教育科目である。比較文化学部では、1・2年次には、全学共通科目に加えて、学部共通科目の中の日本に関連した科目群を主に受講する。そのうえで、2年次以降、学生たちは各文化コースに分かれてコースごとに専門教育科目を学んでいくことになる。3年次には比較文化演習、いわゆるゼミが始まり、それぞれ卒業論文で扱うテーマに関する学びを開始する。4年次では4年ゼミの活動を行い、卒業論文を作成する。

今回ジョイント授業を行った「比較社会論」は、コースの専門科目ではなく、学部共通科目のなかにあり、どのコースに所属する学生でも履修できる科目である。また「比較社会論」は選択科目であり、履修学年は2～4年生となっている。

筆者は10年以上「比較社会論」を担当してきているが、実際に当該授業の受講生の大半は、2・3年生である。また当該授業は後期の開講となっている。受講生の多くは、各文化コースの専門教育科目の学習をすでに開始しており、これから卒業論文作成にむけて各自テーマを見つけていく、そ

のような段階にあるといえるだろう。

ここで、比較文化学部の学生は特定の学問分野を体系的に学んでいるわけではないという点に注意が必要となる。筆者は1・2年生対象の授業も担当しており、それらの授業では歴史学の基礎を教えているが、それらの授業を受けた学生は限られている。学生たちの多くは、歴史学の基礎や研究方法を身につけていないと想定される。それを前提とした授業計画が必要となる。

2021年度の後期に開講された「比較社会論」の履修者は95名であった。約半数が2年生、残り半数程度が3年生であり、数名4年生の受講者もあった。授業形態としては、新型コロナウイルス感染症対策のためオンデマンド授業となった。オンデマンド授業は、リアルタイム双方向授業ではなく、教員が作成した動画を学生がオンライン上で視聴するものである。この授業では、オンラインシステム上でレジュメと動画を配信して進めていくことになった。

## 3. ジョイント授業の実践

「比較社会論」の授業15回のなかで、共通テーマで行うジョイント授業をどう位置付けたかを述べる。

### 3.1. 授業全体の構成と、今回の試み

初回の授業において、シラバスにも示した当該授業のねらいを提示した。紙幅の都合により、学生に示したものを簡略化して以下に示す。

この授業では、中世ヨーロッパの社会史、およびロンドンという都市の歴史を扱う。中世ヨーロッパの人々はどのような家に住み、どのようなモノを食べ、何を着ていたのだろうか。教科書（堀越宏一・河原温『図説 中世ヨーロッパの暮らし』河出書房新社、2015年）をもとにヨーロッパ社会について学ぶとともに、授業担当者が専門とするロンドンという都市についてやや詳しく取り上げる。中世ヨーロッパの都市史・農村史の概要と、中世ロンドンに関する事例研究を組み合わせることで、ヨーロッパ各地とロンドンとの比較の視点を取り入れて学んでいく。

授業の到達目標としては、歴史学の考え方を学ぶこと、特に社会史と呼ばれる分野の考え方や研究方法を学ぶこととした。

また、授業の進め方は次のように提示した。受

講師は教科書を予習したうえで授業動画を視聴する。授業動画と同時にレジュメも配信されるので、レジュメを見ながら動画を視聴する。授業後には、受講生は授業コメントを、オンライン授業支援システム上で提出する。授業コメントとは、その回の授業で何を学び、どんな感想を持ったか、疑問に思った点は何か、といったことを学生が書くものである。当初、授業コメントの文字数は200字程度としていたが、かなり長文でコメントをってくる学生が多かったため、400字程度に変更した。この授業コメントの提出と期末レポートにより、成績評価を行った。

授業では、学生からのコメント数点を冒頭で紹介して、授業の振り返りと次のテーマへの導入とした。それにより、学生たちは、他の受講生が何を考えているのか知ることができる。なお、受講生が95名と多いため、個別に対応したほうが良いと思われるコメントに対しては、教員から直接返信コメントを送信した。それにより学生とのコミュニケーションを図った。本稿でも学生のコメントを紹介するが、その際には一部を抜粋して示すこととする。

授業全体のスケジュールは以下の通りであった。それぞれの回において、教科書の内容を解説するとともに、具体例として中世イングランドの農村および中世ロンドンの事例研究を示すこととした。下線部、第12回～14回の授業（14回目の授業は冒頭20分程度）が共通テーマで行ったジョイント授業である。

- 1回. ガイダンス インTRODクシヨン: 中世とはいつか、ヨーロッパとはどこか
- 2回. 中世ヨーロッパの歴史: 古代から中世へ
- 3回. 中世の農村の暮らし
- 4回. 村の姿, イングランドの村
- 5回. 農民の仕事
- 6回. 中世都市の誕生
- 7回. 都市の労働
- 8回. 中世のロンドン
- 9回. 中世の人々の一年と一生
- 10回. 衣食住
- 11回. 中世後期ロンドンの文化
- 12回. ジョイント授業「人を区別すること」(1). 中世ロンドンの「外国人」
- 13回. ジョイント授業「人を区別すること」(2)

### 前近代中国における外国人イメージ

14回. ジョイント授業のまとめ, 近世ヨーロッパの都市

15回. 授業のまとめ

このスケジュールからも分かるように、全15回の授業の後半に、共通テーマ「人を区別すること」を扱うジョイント授業を配置した。受講生たちが中世ヨーロッパ、そのなかでのロンドンについて基本的な知識を得た状態で、それまでよりも専門的な内容を含む授業を行うことが効果的であると判断したためである。

ジョイント授業の具体的な方法としては、YouTube動画を配信し、資料はオンライン授業支援システムにて配信した。第12回は筆者、第13回を中国思想史の専門家が中心となって授業を行ったが、いずれの回でも2人で語る時間を設けた。教員同士の質疑応答だけでなく、授業後に学生から寄せられたコメントを紹介し、そこからさらに教員のコメントを付け加えた。第14回の授業では、授業冒頭の時間を使って全体の振り返りを行った。

### 3.2. ジョイント授業 (1) 中世ロンドンの「外国人」

第12回授業の冒頭で、以下のように「ジョイント授業のねらい」を説明した。

「比較社会論」第11回までの授業では、ロンドンとヨーロッパの他の都市とを比較しながら中世の社会について考えてきたが、今度は遠く離れた中国との比較の視点を取り入れる。それが今回のジョイント授業である。中世のロンドンと前近代中国を取り上げ、共通テーマとして「人を区別すること」をおく。このテーマは現代の差別の問題にもつながる重要なテーマである。今回は「外国人」に着目する。前近代の人々が書き残した史料を「外国人」を切り口として読み、史料が書かれた時代の人々にとっての「人を区別すること」や、「外国人」観を見ていく。

第12回授業は筆者の研究テーマである中世ロンドンの「外国人」を取り上げた。中世後期のロンドンには多くの人々がイングランド内外からやってきていた。2012年～2015年にイギリスで行われたプロジェクト England's Immigrants 1330-1550: Resident Aliens in the Late Middle Ages を紹介し、公表されたウェブサイトも紹介した<sup>[4]</sup>。このウェブ



サイトの機能を利用して、イングランドへやってきた「外国人」の出身地を地図上に示し、どのような地域から人々が移動してきていたのかを概観した。

そのうえで、筆者がこれまで行ってきた研究で分かってきたことを紹介した。イングランドではヨーロッパの他地域より早く、中世後期から「イングランドの外から来た人々」、現代でいう外国人が強く意識され始めていた。中世イングランドで「よそ者」を指して用いられた語には、*strange*, *foreign*, *alien* がある。*strange* と *foreign* は「よそ者」一般を指して用いられたが、14世紀半ば以降 *alien* という語が「イングランド以外の地域の出身者」、もしくは「イングランド王の支配領域の外で生まれた人」をさして議会の記録などにおいて用いられるようになった。なお、中世ヨーロッパでは、いわゆる近代国家が形成されていないため、現代的な意味での外国人とはやや異なる意味合いを持つものとして、「外国人」と括弧付きで示している。

15世紀のロンドンにはおよそ3500人の「外国人」が居住しており、市内の人口のおよそ6%を占めていたと推察されている。15世紀に「外国人」を対象として徴税が行われた特別税の査定記録から、研究が行われてきている<sup>[5]</sup>。

ロンドンの「外国人」は、出身地ごとに特徴があったとされる。イタリア諸都市からやってきた人々の多くは、金融業や海外取引に関わる商人たちであり、市内中心部の富裕な商人たちが暮らした地区に多く住んでいた。男性の単身者が多く、一定の期間仕事をした後で、故郷に帰っていくケースがほとんどであったが、なかには、イングランドにとどまり、そこで一生を終えた人もいた。またハンザ商人は、テムズ川沿いに商館を持ち、その内部や周辺に暮らした。彼らもイタリア諸都市出身者と同様に、富裕な商人たちであった。

商人ではなく、靴職人や皮革職人、職工などの職人や、徒弟、使用人としてやってきた人々もいて、彼らの多くはヨーロッパ大陸の低地地方（現代のオランダやベルギー、フランス北部など）や北ドイツ出身者であった。また、15世紀当時にはまだイングランドにはなかったビールの醸造業者もいた。当時のイングランドではまだほとんど飲まれていなかったビールをもたらしたのが、「外国人」醸造業者であった。

職人層の「外国人」の多くは東側および市壁外

にかけて、比較的多く居住した。中心部ではなく市壁の外に広がる地区は、比較的安価に商売を始めることができたためであると推察されている。また、大陸低地地方・ドイツ出身者のなかには女性もいたことが分かっている。家族で移動してきた人々がいたと推察されてきている<sup>[6]</sup>。

以上のようにロンドンの「外国人」の概要を見たうえで、15世紀の年代記を利用して、「外国人」がどのように描かれたのかを見ていった。

年代記とは、簡単にいうと「いつ何があったか」を年代順に記録したものである。中世ヨーロッパでは、宗教団体の歴史を残すため、あるいは王侯の事績を記録する目的で年代記が作られることが多かった。聖職者の手によってラテン語で書かれた年代記が多い。しかしロンドンでは15世紀から16世紀初頭にかけて、都市の年代記が英語で書かれた。また、ロンドンの年代記が書かれた写本の多くが、聖職者ではなくロンドン市民（都市の指導者層）によって書かれ、保有されたと考えられている。ロンドンの年代記は、ロンドンという都市の記録を残すことを意図して、主に市民たちによって作成されたと考えられている<sup>[7]</sup>。

15世紀に作成された年代記<sup>[8]</sup>において「外国人」が描かれた場面をみると、議会で「外国人」に特別税を課すことが決まったことや、ロンドン市内での「外国人」による商取引仲介の規制についての取り決めが記録されていた。ロンドンの市民たちは、商業活動を行う際のライバルとして、「外国人」を意識していたことが分かる。

一方で、王の入市式の際に市民たちだけでなく「外国人」たちも行列を作って王を迎えに赴いたという記述もあった。入市式とは王侯や高位聖職者が都市にやってくる時の都市の儀礼である。1432年のイングランド王ヘンリ6世の入市式の様子は、聖職者ジョン・リドゲイトによって英詩としてまとめられ、年代記に記録された。年代記中の英詩は、市民たちが馬に乗り、行列を作ってロンドン郊外の地ブラックヒースまで王一行を迎えに行く場面から描写する。市長と参事会員たちは赤の衣装を着ており、市民たちは白い衣装を着ていたという。その後に「外国人」も描かれた。ジェノヴァ人、フィレンツェ人、ヴェネツィア人、ハンザ商人たちが、それぞれ従者を伴って馬に乗って、市民たちの後に続いたと書かれている。ここでは、市長、参事会員、その他の市民たちに続

いて「外国人」が描かれており、ロンドンの市民層の序列意識を見て取ることができるかもしれない。また、国際都市ロンドンのイメージが良きものとして描き出されているといえよう。

まとめとして、ロンドンの年代記にみられる「外国人」描写からは、「外国人」に対して市民たちの利益を守るという意識や、都市の豊かさを誇示する姿勢がみられる。そこには、年代記を書写したロンドンの市民層の意識が反映されているといえるだろう。

しかし、「外国人」といっても多様であって、富裕な商人たちだけでなく、職人たちや女性たちもロンドンにはいた。年代記からはそのような多様な「外国人」の姿は、これまでのところ見えてきていない。今後も年代記における「外国人」について検討を行っていく。

### 3.3. ジョイント授業(1)に関する教員同士の対話、学生のコメントへの返答

上記 3.2 の講義の後、教員同士での質疑応答を行った。まず、年代記において「外国人」の顔立ちの特徴などには言及されないのかという質問が中国思想史の専門家からあった。それに対する返答としては、ロンドンの年代記においては、「外国人」の外見上の特徴はほとんど描かれていないということをした。「外国人」が襲撃された事件なども年代記には記録されているのだが、何を基準に「外国人」と判断して攻撃したかという点については、現在までの調査では分かっていないのである。ただし、たとえば、ハンザ商人を襲撃した時に暴徒は商館を襲っている。住む場所で特定したのかもしれない。また、入市式の記述では市民たちの衣装に言及された。「外国人」に限らず、その人が何を身に着けているかということも、区別の指標の一つになったといえるだろう。このような筆者の回答に対しては、中国でも衣服による区別は見られるので、次回の授業で取り上げるという話になった。

また、ビール醸造業者が「外国人」なのはなぜかという質問があった。これについては、15世紀イングランドではまだビールが一般的でなかったこと、ヨーロッパ大陸からやってきた「外国人」がビールをもたらしたということを説明した。それにより「外国人」ビール醸造業者が、エール醸造業者から反感を持たれることがあった。すると、

「ビールの方がおいしかったのか」という疑問があがり、それについてはよく分からないので、後日回答することとした。まだ分からないことも多いということ述べて、第12回授業は終了となった。

次の第13回授業の冒頭において、学生からのコメントを紹介し、教員同士でもう一度対話を行った。学生からのコメントには、たとえば次のようなものがあった。

- ヨーロッパの低地地方から多くの人々が移動していたことが興味深かった。自然災害があって移動してきたのだろうか。
- 先生たちのやりとりを通して勉強になることが多かった。ビールは美味しかったから好まれたのかどうかわたしも気になった。

最初のコメントに対しては、自然環境や戦争などによって、比較的安定した賃金が得られたイングランドへの移動を選んだ人々がいたことを説明した。とはいえ、イングランドでも戦いは頻繁にあったことも指摘した。

また、教員同士の対話においても話題になったビールについては、他の学生からも関心を持ったというコメントがあったため先行研究の成果を紹介した。ビールは北ドイツで13世紀頃作られるようになり、広がっていったが、エールに比べて長距離輸送にも適しており、長期間の保存ができ、安価で提供可能であったとされる。15世紀、イングランド人はエールの方をよく飲んでいて、その時は、エールの方が栄養豊富であると考えられていたし、ホップ由来のビールの苦みが、甘みの強いエールを飲んでいてイングランド人の舌に合わなかったと考えられている。それでも、次第にビールがよく飲まれるようになり、16世紀にはイングランド人もビール醸造をさかんに行うようになるのである<sup>9)</sup>。このことについて、教員同士の対話のなかで、食文化の変容には、人々の味覚だけでなく社会的・経済的な要素が関わっているということを確認した。

次に、史料として利用した年代記に関して学生から寄せられたコメントを紹介した。たとえば以下のようなコメントがあった。

- 外国人と大きく括らず、職業とかで分けたら、他の内容が年代記に記されていて面白いものができたのではないだろうかと思った。区別というか、差別というか外国人という捉え方はこの時代から良い考えではなかったのがわかった。
- 前回までの授業の傾向で、中世のヨーロッパは自分たちの国にステータスや誇りのようなものを感じていた気がするので、外国人が入り込んでくることに違和感などを感じていたのかと思いました。外国人だけの税を課せられたりと厳しい対応であると感じました。
- 当時、ロンドンに来た外国人を市民は共同体を脅かす存在としていたと共に、入市式には参加させていたことから一概に除け者にしていただけではないとわかりました。そのことから外国人（への対応）を上手く使い分け、イメージを保っていたのだと思った。

これらのコメントに対して、まず史料をみる視点についての学生からの問題提起はとても重要であると述べた。「区別」を見ることで、ことさらに人々の対立が浮かび上がってしまうことには、注意が必要である。次の講義「前近代中国における外国人イメージ」とも関わる重要な視点であることを確認した。また、職業ごとに異なっていたであろう、中世ロンドンにおける「外国人」への対応については、最近、日本でも研究が行われていることを紹介した<sup>[10]</sup>。

それまでの授業の内容を踏まえてのコメントも優れたものとして紹介した。ただし今回見た史料からは、学生のコメントにあった「国」という意識よりは「都市」への誇りがみられるということを指摘した。

年代記における「外国人」への対応を、どのようにとらえるかという点では、上に挙げた学生のコメントのように、「使い分けていた」のであろうと述べた。

他に、ロンドンにおける反「外国人」感情を強く意識した学生もいた。史料の読みには様々な可能性があるということが分かる。他の史料などを

検討しながら、慎重に判断していく必要があることをあらためて話し合った。

また、現代の差別の問題につなげて考えたコメントも紹介した。それに関連して、イングランドの「移民」研究は近年まで16世紀後半以降を対象としてきたこと、しかし実はその前からヨーロッパ大陸との間で人々の交流があったことを指摘することが、イギリスにおける中世の「外国人」研究のねらいの一つであることを述べた。その背景には、イギリスのEUからの離脱という現代の問題もあるということも述べた。

#### 3.4. ジョイント授業 (2) 前近代中国における外国人イメージ

第13回授業の中心となったのは、中国の前近代における「外国人」表象についての講義であった。7世紀頃に編纂された『五行大義』に見える人相術に関する記事と、17世紀に刊刻された絵入りの百科事典(『三才図会』)における夷狄、すなわち「外国人」表象を検討した。この授業内容は、以下の通りである。

まず史料として、『五行大義』という五行思想に言及した学説をまとめた書が取り上げられた。この史料は、隋の時代(581-618年)に編纂され、中国では宋代(960-1279年)までは存在していたが、それ以降は失われたものである。それが日本には8世紀には伝わり、陰陽道の必読書とされ江戸時代には一般にも出版され広く読まれた。授業では、1333(元弘3)年に出版されたものを底本とし<sup>[11]</sup>、そのなかで人の姿かたちについて取り上げた部分を読んだ。

この史料を検討する前提として、まず五行思想についての解説があった。これは、おおまかにいうと木・火・土・金・水を基準として、方角や季節、色をはじめ、道徳観念といった人の徳目など諸々の事象や概念を5つに分けて考えるものである。授業では図を利用して、五行の循環関係についても整理して示した。

『五行大義』において今回検討した部分は、「相書には次のようにある」と書き始められている。引用元が明記されて、情報が提示されているのだが、相書によれば、住んでいる場所によって、体の形と本性に違いがあるということである。東夷の人、南蛮の人、西戎の人、北狄の人、そして中華の人それぞれの容貌や性質の特徴が挙げられた。



それぞれ五行思想の影響のもと、容貌も異なっていると書かれた。そのなかでも中華の人は容貌が整っていて、それはその土地が平和であるためである、と書かれた。中華の人以外の「夷狄」のイメージは、文化的中心地である中央から離れば離れるほど野蛮だという考え方に沿っている。

『五行大義』には、「夷狄」について、顔の特徴だけでなく服飾の特徴も書かれた。たとえば衣冠という言葉があるが、帽子（冠）をかぶっているかどうかには言及されることが多い。また、服装のデザインとしては丈の長さについての記述もある。適度な長さの服を着ていないのは野蛮な証拠だと考えられたためである。また、身体的特徴として目・口・鼻といった顔のパーツも取り上げられた。7世紀ころの占いの本はそういうことに注目していたといえる。

一方、『三才図会』は17世紀に出版された本である。日本に輸入され、日本ではその影響のもとに『和漢三才図会』が作られた。三才とは天と地と人のことで万物を意味する。つまり、世界の様々な事物を説明した本である。天文、地理、人物、時令、草木などの14部門に分けて説明している。

「外国人」については人物の巻で取り上げられた。

『三才図会』では、挿絵とともに、様々な「国」の人々の特徴が示されている。たとえば、日本については、僧と思しき人物の挿絵が描かれ、本文では、日本人は沿岸で強奪を生業としていると書かれている。挿絵と本文とが乖離しているようにも見える。ほかにも、架空の国も含めて、様々な地域とそこに住む人々の特徴が挿絵とともに描かれた。

『三才図会』の特徴としては、自国の歴史上の人物については身体的特徴を記述するが、「外国人」については容貌の記述は少ないといえる。「外国人」については容貌が挿絵に描かれているからかもしれない。ただし特に奇異だとされた容貌には言及していたようである。

### 3.5 ジョイント授業(2)に関する教員同士の対話、学生のコメントへの返答

3.4を踏まえて行った教員同士の対話では、史料について、ロンドンと中国とを対比させて、2人の教員が意見交換を行った。まず、史料は、一方が都市の年代記であり、もう一方は言説集・百科事典であり、性質の異なる史料であるという事を

確認した。それぞれの史料から、異なる「他者」像や「人を区別すること」が浮かび上がってくるが、それは地域の違いだけではなく、史料の性質の違いでもあることは大切なポイントである。

史料中の挿絵の有無についても話題となった。中世ヨーロッパの年代記にも挿絵が入っているものはあるのだが、ロンドンの年代記には挿絵はほとんど描かれていない。それは、ロンドンの年代記は、読み手が「見る」ものではなかったということかもしれない。

また、2回の授業で用いられた史料には共通点もある。どちらの授業で取り上げた史料も、語り継がれてきた話を書き留めたり、先行する文献から書写したりした史料であった。先行するいくつもの史料のなかから、誰かが選び取って書き留めたものが、これらの史料であった。歴史的な重層性のある史料であるといえる。

また、どちらの史料も、社会的エリート層に属する人が作成したと考えられている。想定された読者層も社会的エリート層であったと思われる。そして、これらの史料は、作成者が「必要である」と考えた記録を収集したものであるという点も、共通しているといえるだろう。さらに、どちらの史料にも、「私たち」のプライドが見られる。

さらに、15世紀ロンドンの年代記には、中国の史料と違い、顔立ちで人を区別しているような記述が見られないことも話題にのぼった。しかし中世ロンドンにおいても、服装で人を区別したことはあったと考える。また、15世紀ロンドンにおいては、話す言葉の違いも、人を区別する際に重要な指標となったのではないかと話した。ただし、年代記からはそのような「区別の指標」はこれまでの研究では見えてきていない。

以上のように相違点・共通点について話し合ったうえで、次の第14回授業の冒頭20分を利用して、学生からのコメントの紹介を行った。まず取り上げたのは以下のコメントである。

- 高麗国のように帽子をかぶり着物なども中華の文化に近いものを多く受け継いでいるとして少し評価される者もいることから、自分たちの文化に習おうとする者は劣った外国人というみかたを逃れて中心の者に組み込んでもらうことも可能であったかもしれないのかと思いました。

これに対しては、中国思想史の専門家から、中国の史料だったために、「中華」が強調されたのだということには留意が必要だという説明があった。どの国・地域であっても、基本的には自分たちが中心だとそれぞれに考えていたはずである。この点に関連して、それ以前の「比較社会論」の授業内でも紹介した、中世ヨーロッパの都市において書かれた「都市賛歌」(都市を賛美する詩)に言及した。また都市のプライドは、ロンドンの年代記からも見て取れることも述べた。

次に取り上げたのは、衣冠に関するコメントであった。

- 文化的服飾の特徴にあった衣冠は、帽子をピンで留める為、ハゲるとまずいという話がとても面白かったです。ハゲているか、ハゲていないかは、目で見てパッとわかってしまうものだし、それをキチンとしている人のシンボルとしていたのが興味深かったです。そこで、そもそもなぜ帽子を被ることが良いとされていたのかという事が気になりました。また、もしハゲてしまったら当時の人はどうしていたのか気になりました。

これについては、中国においては髪から魂が抜けると考えられていたという回答があった。そのため、帽子は重要だったのである。また、毛髪がなくなると、帽子が安定しないので、ピンを鬘に刺すために鬘をかぶったということである。そういう姿を描いた絵も残っているということであった。この点に関連して、2人の教員の対話のなかでは、髪の毛や帽子も流行に左右されるものであるから、こういった問題から当時の社会が見えてくるのではないかと、ということも話し合った。

また、主たるテーマであった「人を区別すること」や「外国人」に関して、以下のようなコメントもあった。

- 容姿や性格について事細かに特徴が述べられていることから、中国から見た「外国人」像は、イギリスから見た「外国人」像と比べると、「外」と「内」という概念がはっきりしているように感じた。

- 自分達と他者を比べる時、どうしても他者より自分達が優れていると思いたいという気持ちはどちらにも共通し、このように比べることで仲間意識を生み、自分達が団結することにも繋がっていたのではないかと思います。
- ヨーロッパも中国も、人を区別することによってプライドやアイデンティティを確立していることが理解できた。別の授業でアイデンティティ崩壊について学び、いかにアイデンティティを確立することが難しいことであることを学んだ。今までの講義でも、中世ヨーロッパの人はランドマークや小教区、行政区、ギルドなど様々なプライドやアイデンティティを形成している。外国人と比較することで、自分たちがどんな文化や特徴を持っているのかを知る手がかりの一つになっていたのだと考えた。また、史料が作成者も読み手もエリート層であり、社会に必要な知識であったことが印象に残った。様々な地域と関わりが増えていく中で、経済の側面と政治の側面でも他国を知ることは重要なことであるため、外国人を知るということもエリート層にとって重要な知識なのだ、改めて強く理解した。

史料の性質が異なるために、授業では十分に取上げられなかったこともあるが、それぞれに「人を区別すること」を考えてくれたことが伝わってくるコメントであった。他にもいくつかのコメントを取り上げ、学生のコメントから私たちも教えられることが多かったし、質問を受けてまだ分かっていないことが多いということにも気づかされたと述べた。また、人を区別するというテーマは、現代の差別の問題につながる重要な問いであると考える一方で、現代とは異なる前近代社会の「区別の指標」があるのではないかと考えている、ということも2人の教員から述べた。同じ言葉でも時代や場所によって意味が異なることにも注意が必要である。

最後に、一見些細なことのようにも、そこに卒論につながるような問題があることもあるので、受講生のみなさんも興味を持った部分があればそれを追求していったらどうかと述べ、ジョイント授業をしめくくった。



#### 4. ジョイント授業に関する学生からのコメント

第13回授業の最後で、今回のジョイント授業についてどう感じたかということ、学生コメントに追加で書いてもらった。共通テーマについて複数の教員が対話するような授業形態についてどう考えたかという問いかけである。以下、その問いかけにこたえた学生からのコメントを数点紹介する。

- 専門が異なる先生同士の授業を同じ授業内で受けられることは、互いを比較できるという点で比較文化学部という学部の醍醐味でもあるのかなと感じたので私個人としてはとても面白く感じたし、もう4年生で上手くいけばあと少しで卒業になるが、もっとこのような形の授業を受けたかったなと思った。
- コースの異なる先生方の対話は新鮮で貴重なため、非常に勉強になった点が多く、また別の機会があれば授業を受けたいと感じた。
- まさに「比較文化」の授業を受けているなと思った。私は現在ヨーロッパコースに所属しているが、実感としては古代ヨーロッパや中世ヨーロッパを学ぶことが多く、「比較文化」という学部所属している割にはただ学んでいるというものに近い印象を受ける。そのため、自分が主に学んでいる文化を軸に他国の文化を学ぶことができることは、時間を基準にほかの地域で起こったことを比較することができるので新たな発見を通じ、どうしてこの差異が生まれたのかに着目し学びを深めることができると思った。私も実際動画2や3を視聴しながら日本との差異や類似点をヨーロッパと中国で比較し、差異を表に書きだしながら講義を受けていた。今まで受けてきた授業の中で断トツで非常に面白く、「比較」文化学部と唄うからにはこういった授業を必修で取り入れるべきだと感じた。
- 私はアジア文化コースなので、これまで学んだヨーロッパの文化を自分が専門とする東アジアの歴史とも比較するというのは非常に興味深く、多くの知見を得られる経験であった。
- 今回の授業では、ヨーロッパ専攻とアジア専攻の専門的な知識を比較することによって、国や地域に表れる文化の違いが学べて面白かったです。さらに、意見交換や質問をその場で解決してくださるので、分かりやすかったと思います。
- ただ私たちが講義を受けるだけでなく、オンデマンドでも先生たちの会話を聞けることは新鮮であり大きな学びを得られる学習方法であると感じた。どうしても学年が上がるにつれて専攻しているコースの学びしか得られないことが多いが、この方式であれば学部らしい他の文化について最低限の知識であったとしても学ぶことができ、自分の専攻しているコースの新たな学びにもつながると思う。また、専門知識のある先生同士の会話を聞くことで自分になかった視点を持つことができた。また機会があればこのような講義をしていただきたい。
- このような授業を受けたのは初めてで新鮮であり、楽しかった。ヨーロッパに興味があっても比較することで日本だけでなく他の地域と比べて考えることができたからだ。オンラインだからこそできたことでもあったと思うので良いと思う。
- 異なる文化圏の史料を比べることができて興味深かったです。もし可能であればアメリカコースの先生のお話も聞いてみたいと思いました。
- 今回のようなコースの異なる教員の方の授業を受けることができるのは貴重な機会で、非常に嬉しい。教員同士の対話も今までにはない形で、聴いていて楽しかった。オンラインの形が良い方に活かされていると感じた。是非またこのような形で受けたいと思う。

他にも、これまでに受けた経験のない授業形態だったので、興味深く講義を受けることができたというコメントが多く寄せられた。また、コースの枠組みを超えた学びや、教員同士の対話にも魅力を感じる学生がいることが分かった。学生たち

のコメントすべてを額面通りに受け取ることにはできないが、一定数の学生が、このような授業について「比較文化らしい」と感じたことは興味深い。

比較文化学部においては、コース間のハードルは低く、コースを超えて授業を履修することが可能である。しかし実際に他コースの授業を履修する学生は少ない。コースごとの専門科目ではなく、学部共通科目において、異分野横断型授業を行うことで、より幅広い学びにつながる可能性があるのではないかと。

また、比較文化学部では、これまでジョイント授業やオムニバス授業の試みは、ほとんど行われてきていない。それぞれの授業で提示される多様な研究成果を、学生たちが「比較」することが期待されてきたのかもしれない。今後、一つの授業内において、教員同士が互いの専門分野を語り合うような授業を取り入れていくことも考慮してもよいのではないだろうか。

いっぽうで、以下のような意見も寄せられた。

- 今までは「日本」と他国を比べる授業が多かったが、他国と他国を比較するのは初めてであり、知識のない他国の情報を比べることに慣れてなく、少し難しかった。

授業内容が難しいと感じる学生もいたことが分かる。わかりやすい説明ができるよう工夫していく必要があるが、限られた授業時間の中で、どこまで専門的な内容を語るのかということも検討課題である。

また、授業動画を作成するうちに、内容が盛りだくさんになってしまったことは反省すべき点である。当初の想定よりも、説明に時間がかかってしまったこともあった。ジョイント授業の授業回を増やしてもよかったかもしれない。

## 5. おわりに

「比較社会論」は、中世ヨーロッパ社会史・ロンドン史を扱った授業であった。その授業の一部に、扱う地域も専門分野も異なる教員が加わり、共通テーマで講義を行ったことで、「学生も共に考える」授業に近づくことができたと考えている。

ジョイント授業作りにあたり、異なる分野の研究内容や議論の流れを理解することは、当初の予想以上に困難だった。そのため、互いの研究内容

に対して率直に質問して語りあうことをこころがけた。また教員の議論・意見交換の様子を学生にも見せることとした。学生からのコメントに「先生が言った疑問は、私も考えたことだった」というものがあつたが、専門分野が異なるからこそ、素朴な質問から議論を行うことができたことの現れとしてとらえることができる。

今回の取り組みにあたって、もう一つ念頭にあったことは、専門的な研究と教育との接続である。研究者を目指す学生がほとんどいない学部においても、専門的な研究の成果や、考え方、手法を授業に取り入れていくことは重要であろう。それは学生の学ぶ意欲を向上させることにつながると考えるためである。ただし、今回のジョイント授業では、この点は十分には達成できなかった。それぞれに史料を提示したものの、学生に実際に史料を解読させたり、意味を考えさせたりするまでには至らなかった。

専門的研究を教育にどう生かすかということについては、それに関連した授業実践が行われてきている<sup>[12]</sup>。またイギリスのロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジでは Research Based Education がすすめられてきた<sup>[13]</sup>。これは、専門的な研究の結果だけでなく、「研究の過程」を学生たちに経験させることを重視する教育である。Research Based Education の教育実践の成果も発表されている<sup>[14]</sup>。この問題については引き続き取り組んでいきたいが、今回の試みを通じて、教員同士、また教員と学生とが、あるテーマをもとに対話を繰り返しながら、他分野との協同を試みていくことが研究と教育をむすぶ契機となると考えている。そして、そうした場を卒業生などにも広げていくことが、「学び続ける場」を、大学が提供することにもつながるのではないだろうか。

## 謝辞

本研究は、令和3年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト（課題番号 K2107）の助成を受けた研究成果の一部です。共同研究者として一緒にジョイント授業に取り組んでくださり、本稿執筆にあたって助言をくださった、比較文化学部佐藤実氏に感謝申し上げます。

## 注

[1] 日本学術会議 人文・社会科学の役割とその振興

に関する分科会。学術の総合的發展をめざして—人文・社会科学からの提言—。2017年, p.13.  
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t242-2.pdf>, (参照 2022-3-25)。

[2] 大学の教養課程における領域横断的なカリキュラムについては以下の文献を参照。有本章編。大学のカリキュラム改革。玉川大学出版部, 2003年。オムニバス授業の実践に関する論文としては以下を参照。江川陽介ほか。1年次生へのオムニバス授業導入の意義と課題—教育学専攻専門科目「人間と教育」FDアンケート結果の分析—。国士舘人文学, 3巻, 2013年, p. 125-136。

[3] 研究が極度に専門化し, 研究者が, 自らの研究と現在の社会や文化の諸問題との関連性を意識しなくなってきたことも指摘されてきた。この問題については以下を参照。将基面貴己。人文学としての日本研究をめぐる断想。日本研究. 55巻, 2017年, p. 63-72。

[4] “England’s Immigrants 1330–1550”.  
<https://www.englishimmigrants.com/>, (参照 2022-4-10)。

[5] Bolton, J.L., *The Alien Communities of London in the Fifteenth Century: The Subsidy Rolls of 1440 and 1483-4*, Paul Watkins, 1998.

[6] 上野未央。15世紀ロンドンにおける「外国人」：出身地と居住地から。大妻比較文化, 21号, 2020年, p. 5-19。

[7] McLaren, Mary-Rose. “Reading, Writing and Recording. Literacy and the London Chronicles in the Fifteenth Century”. Davies, M. et al eds., *London and the Kingdom: Essays in Honour of Caroline M. Barron*, Harlaxton Medieval Studies vol. XVI, Paul Watkins, 2008, p. 346-365.

[8] Kingsford, C. ed. *Chronicles of London*, The Clarendon Press, 1905.

[9] Luu, Lien Bich. “Dutch and their Beer Brewing in England 1400-1700”. Kershen, Anne J. ed. *Food in the Migrant Experience*, Ashgate Publishing Limited, 2002, p. 101-133.

[10] 佐々井真知。中世後期ロンドンの金細工師ギルドと「外国人」：規約に注目して。人文学部研究論集, 43巻, 2020年, p. 71-97。

[11] 中村璋八。五行大義の基礎的研究。明德出版社, 1976年。

[12] 歴史学の授業実践の事例研究として以下を参照。青柳かおり。大学における西洋史概説の授業改善に関する研究。大分大学教育学部付属教育実践総合センター紀要, 35号, 2017年, p. 43-54。加来奈奈。大学における西洋史教育の主體的学修の試み。金沢学院大学紀要, 16巻, 2018年, p.32-37。「文学」の教育実践に関しては以下を参照。米塚真治。学生の質問をベースにした「文学」授業運営の実践：教師が答える・学生が答える。大妻比較文化, 17号, 2016年, p. 3-17。米塚真治。学生の質問をベースにした「文学」授業運営の実践2-「学生が答える」篇。大妻比較文化, 18号, 2017年, p. 35-57。

[13] ”Research Based Education”. University College London.  
<https://www.ucl.ac.uk/prospective-students/undergraduate/why-choose-ucl/research-based-education> (参照 2022-3-25)。

[14] Carnel, Brent, et al. *Developing the Higher Education Curriculum: Research-based Education in Practice*, UCL Press, 2017.

(受付日：2022年4月15日, 受理日：2022年6月16日)

## 上野 未央 (うえの みお)

現職：大妻女子大学比較文化学部准教授

お茶の水女子大学人間文化研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(人文科学 お茶の水女子大学)。専門はイギリス中世史。現在は、中世ロンドンの「外国人」に関する研究を行っている。

主な論文：15・16世紀ロンドンのミンストレル—同業者同士のつながりに着目して—。大妻比較文化. 22号, 2021年, p.3-19。15世紀ロンドンにおける「外国人」：出身地と居住地から。大妻比較文化. 21号, 2020年, p. 5-19。